

織田作之助関係書簡を読む(一)

中之島図書館 灘井 雅人

中央図書館 小笠原 弘之

苗村 昌世

三島 美幸

八木 美恵

はじめに

中之島図書館所蔵の「織田文庫」は、平成29年に織田作之助の姪で、養女でもある織田禎子さんより寄贈された資料を新たに追加し、織田作之助関連資料の一大資料群となった。これを契機に、今後の展示等に活用することを主な目的として「織田文庫」収蔵資料および今回の追加資料より、関連の書簡等を翻刻する勉強会を職員有志で開始した。また、図書館ではこうした資料に記載の事項や内容に踏み込んだ問い合わせを受けることが多いため、図書館司書としてのレファレンススキルの向上を図ることも目的として、図書館で閲覧できる関連資料やデータベースを調査し、書簡の内容やその背景を読み解くこともあわせて試みた。

今回は、「織田文庫」より編集者・西田義郎差出書簡一通、追加資料より作家・宇野浩二差出の書簡一通を掲載する。

凡例

- ・ 発信年月日／発信地住所／差出人／宛名人(その他情報)
- ・ 促音、濁点等が不明確なものは読みやすいように適宜修正した。
- ・ 吹出し等による挿入は文内の正しい位置に記載し、 で囲んだ。
- ・ 本人の書き間違い、誤植と思われる表記は、そのまま翻刻し、「ママ」を付した。削除が明らかなものは記載しなかった。

一 西田義郎差出織田作之助宛書簡

昭和二十一年八月二十八日／東京都京橋區京橋一丁目三番地 改造社より／西田義郎／織田作之助宛 侍史の添書あり(封書 改造社便箋 二枚)

前略、お暑いことです。東京は、それでもこの二、三日前から、秋風が申訳文にお訪れてくれますので、朝夕は、余程楽になりました。柴野さん^{註1}が一週間程前から、東京へ来られておりまして、毎日御奮斗です。貴方のお噂も、柴野さんから承り、御健在をおよるこび申上ます。過日、坂口安吾^{註2}君の自宅へ、遊びに参りまして、種に貴方のお噂を申上りましたところ、是非この秋、多分十月中旬頃 京都へお邪魔させて頂き、貴方様とお逢ひいたしたいと申してゐました。彼も、この秋 中公から短篇集が出ますので、十月には京都にて、よく遊びよく飲みたいと、意気込んでゐます。私も坂口君の相伴をして、参る心算でゐます。その節は、お元気なお顔を拝見いたしたく存じます。またこの前(大阪)京都へ参りました節、お話しありました「文楽」に関するもの^{註3}、この秋には御期待申上てゐます。出来るならば、小説ではなく、「改造」の中欄をお賑し下されば、幸甚です。尚、柴野さんか^{註4}らのお話では、私のお礼状が、(柴野さん、清水さん^{註4}のと一緒に)出^{註5}しました。貴方さまの手もとへ、参らなかつたとか。全く驚き入りませ。重ねて、在京中の御厚情に対し、厚くお礼申上ます。悪らず御諒承下さいませ。

京都の皆さまによろしく。

昭和二十一年八月二十八日

西田義郎

織田作之助様
侍史

【註】(1) 柴野さん…柴野方彦(しばの・まさひこ) 1913-1979 京都・世界文学社の創業者 (2) 坂口安吾(さかぐち・あんご) : 1906-1958 作家 (3) 「文楽」に関するもの…「二流文楽論」 (4) 清水さん…清水金一郎(しみず・きんいちろう) 松竹下加茂撮影所企画部、織田作之助が京都の世界文学社に出入りしていた時の寄宿先と思われる

【解説】

雑誌『改造』の編集者・西田義郎は、昭和21年6月頃仕事で関西へ来た際に京都の世界文学社で、織田作之助と対面している。本状は、その際のもてなしに対する御礼状が織田に届いていなかったことへのお詫びおよび近況報告の書簡である。表書きには「織田作之助様侍史」とのみあり、郵送されたものではない。

西田義郎は、昭和21年11月25日の太宰治、織田作之助、坂口安吾の鼎談を企画した立役者であり、織田の『可能性の文学』にも編集者「N氏」として登場する。同人で執筆や翻訳もしていたが、後に出版社・改造社の編集者を経て編集長となった。また、西田は坂口安吾とも親しく付き合っており、『酒のあとさき』などの坂口の作品や評伝にも度々登場する。本状では、近況として、坂口宅を訪問して織田のことを話のタネにしたところ、坂口が「是非この秋、多分十月中旬頃 京都へお邪魔させて頂き、貴方様とお逢ひいたしたい」と言っていたことを伝えている。西田としては、この時期にはすでに織田と坂口を引き会わせたいと目論んでいたのかもしれない、のちの鼎談企画につながる流れが見えるようである。興味深い。

坂口の友人である大井広介の著作「坂口・太宰・織田作」での回顧によると、坂口も同人となっていた『現代文学』に井上友一郎からの依頼で織田が寄稿していた縁もあり、大井を介して、織田からは坂口に会いたいというアプローチがあったようであるが、坂口はそれを一蹴してい

る。坂口も含め、『現代文学』同人は、なぜか織田の作品を好まなかったようだ。ひるがえって、本状を見ると、西田から織田の話を聞いたあと、坂口は、織田と会うことに意欲的だった様子である。織田と面識がなく、作品しか知らない大井では、坂口の拒絶に対して二人の間を取り持つことができなかったが、織田と面識のあった西田は、そのあたり上手くとりなせたのか。あるいはその後の作品に何か坂口が感じるものがあったのか。この心境の変化はどうして起こったのか。西田が坂口との会話を詳細に記録してくれなかったことが惜しまれる。

残念ながら、坂口が昭和21年秋に関西に来たという記録は見つかっていない。同年4月に発表された『墮落論』で一気に筆名を高めた坂口は、原稿依頼が殺到した結果、注文をこなすためにアルコールや薬物を多用していた時期で、旅行どころではなくなっただけのものと思われる。織田と坂口、二人の邂逅は、昭和21年11月22日、実業之日本社での座談会を俟つこととなった。

中之島図書館では、西田から織田への書簡はこの一通しか所蔵していない。しかし、坂口の織田に対する心情の変化を考えた時、無頼派三人の鼎談実現に至るまでの西田の尽力をうかがうことができる貴重な資料だと思われる。

【調査に使用した資料】

- ・大谷晃一『織田作之助…生き、愛し、書いた。』(沖積舎 1998)
- ・大井広介『坂口・太宰・織田作』(『バカの一つおぼえ』近代生活社 1957)
- ・七北数人『評伝坂口安吾…魂の事件簿』(集英社 2002)
- ・村上護『安吾風来記…フアルスの求道者』(新書館 1986)
- ・若園清太郎『わが坂口安吾』(昭和出版 1976) ほか

二 宇野浩二差出織田作之助宛書簡

(差出し年不明)十二月七日／松本市今町四三三より／宇野浩二／大阪府南河内郡野田村丈六／織田作之助宛(封書 便箋 三枚 速達 四十銭)

拝復

◎「藝文」^{註1}が「世界文学」^{註2}にかかりましたのは遺憾に存じます。しかし、この間上京のとき、木村君^{註3}にその話しをしましたら、「ああ、それは柴野君でせう、それなら、三笠^{註4}で長篇(ホンヤク)分載の雑誌を出したときに関係した人ですから・・・」と京都ナマリの言葉で、あの独特の微笑をうかべながら、云ひました。

◎僕のは『翻訳の文学』^{註5}といふ題にいたしますが、先日シメキリの小説が二つありまして、それがまだその二つのうちの一つの半分しか出来てみません。その二つのうちの一つは、大へんすみませんが(お目にかかりましたとき申しわけをいたしますが、**義理ある人のやっつてゐる雑誌の**急急を要するために、「藝文」に出すお約束をしました長篇の一回分はしがき)を出すことにしました。急、急、急には、これが一ばん書きやすかったからです。その代り、「世界文藝」^{註6}には、『翻訳の文学』レンサイちゆうに、一回休みとしまして、その時に、かならず小説を書きます。◎右の事情のために、(右の事情の**ほかに**、三四ヶ月前から約束しました筑摩書房発行の「展望」^{註7}の小説が十日ヶ切で、書房主から、昨夜「九

ヒオネガヒシマシタゲンコウイタダキニアガリマス」といふ急電を打って来ましたので、これは前に十枚くらゐ書きかけのがありまして、それのつづきを書いたらよいのですから、それを十一日までに書き上げて、すぐ『翻訳の文学』をテツヤしても、十二三日にソクタツカキトメでお送りいたします。

◎十五日からのバカセイゲンで汽車の切符がますます取れなくなるらしいですが、こちらで取れませんでしたら、全国書房^{註8}で往復を取ると云つて来てみますから、どちらかので、大阪(主として京都)におうかがひしたいと存じます。が、年内はおくれにおくれた原稿のために御伺い出来ませんから、来年の一月ちゆうとしたいと望んでをります。

◎「文藝春秋」は例の別刷の「文藝春秋」^{註9}にずっと前にたのまれまして、上京のときも、おもはぬところで、そのかかりの記者につかまりまして、サインクされましたが、これは出来さうに間にあいさうにありません。ヶ切が先月(十一日)二ぱいですから。もつとも二三日前に電報でサインクしてきましたが・・・

◎『夫婦善哉後日』^{註10}は、筋書**か**ら想像いたしますと、前の(元)のお作のやうにマトマリすぎた作品でないらしく思はれますので、そのうちにハタンがありまして、そのために、かへって、面白いものがお出来るのではないかと存じます。僕は天衣無縫^{註11}などといふのはあまり好みません。

◎『宇野浩二の手紙』^{註11}は、あなたならお任せいたしますが、この題名は、僕は好みませんが、(キマリわるいのもその一つ、)既に、『志賀直哉の手紙』^{註12}(これは武者小路さん^{註13}が志賀さん^{註14}の手紙だけをならべて、ちよつとカイセツを附けたもの)ですが)といふのがあります上に、あなたが編輯なすって、注釈を入れられて、随筆風に書かれる、といふことに、興味(つまり、宇野より織田に興味)がありますのでお任せいたします。

◎終りに、「世界文藝」^アなら、僕の『翻譯の文学』は、書きよ^クなりますので、すすんで書きつづけたいと存じます。これは面白くなるつもりです。

十二月七日

宇野浩二

織田作之助様

○北沢君^{註15}の小説、二三日前に、うっかり「新文学」^{註16}に送りましたが、北沢君のものとしてはよいものですから、この手紙と一しよにカミヤシキ君^{註17}にソクタツを出して取りかへして、お送りいたします。

○おなじやうに、十年以上小説の勉強をしてをられますが、北沢君より佐藤君^{註18}の方が、郷土色があります上に、独得なものがあり、カイギャク味がありますので、たとへば北沢君の作が五つに一つ取れるとしますと、佐藤君のは三つに一つ取れますが・・・

【註】(1)「藝文」…柴野方彦が当初創刊しようとしていた文芸雑誌の題名案。最終的には『世界文学』となった。(2)「世界文学」…世界文学社刊行の文芸雑誌 (3) 木村君…木村徳三(きむら・とくぞう) 1911-2005 編集者。鎌倉文庫刊行の文芸雑誌『人間』編集長 (4) 三笠…三笠書房 (5)『翻譯の文学』…宇野浩二が雑誌『世界文学』に寄稿予定だった作品 (6)「展望」…筑摩書房刊行の総合雑誌 (7) 全国書房…大阪の出版社。文芸雑誌『新文学』を発行 (8) 例の別刷の「文藝春秋」…別冊文芸春秋(昭和21年12月月刊誌『文藝春秋』から独立創刊)のことか (9)『夫婦善哉後日』…織田作之助の作品。昭和21年『世界文学』に二回連載して中断 (10) 天衣無縫…織田作之助の作品。初出は雑誌『文芸』昭和17年4月 (11)『宇野浩二の手紙』…織田作之助がグラフ誌に寄稿予定の作品 (12)『志賀直哉の手紙』…武者小路実篤編 山本書店 1936 (13)武者小路さん…武者小路実篤(むしやのこうじ・さねあつ) 1885-1976 作家・詩人・劇作家・画家 (14) 志賀さん…志賀直哉(しが・なおや) 1883-1971 作家 (15) 北沢君…北沢喜代治(きたざわ・きよじ) 1906-1980 作家 (16)「新文学」…全国書房刊行の文芸雑誌 (17) カミヤシキ君…神屋敷民蔵(かみやしき・たみぞう) 全国書房編集 (18) 佐藤君…佐藤善一(さとう・ぜんいち) 1906-2004 作家・政治家

【解説】

作家・宇野浩二から織田作之助宛ての書簡は、織田文庫収蔵書簡の中では最も多く、織田文庫に36通、平成29年度追加資料に10通が残されている。このうち織田文庫収蔵の書簡については、増田周子編『宇野浩二

『書簡集』において全て翻刻されているが、平成29年度追加資料のうち差出年が不明の12月7日・12日・1月21日付の三通については、内容から判断して、前掲書掲載の一部書簡に続く内容のものと推察される。また、これら三通は、『定本織田作之助全集第8巻』収載の昭和20年10月15日・12月10日付宇野浩二宛織田作之助差出書簡とも内容に相関性がある。さらに、12月7日付書簡の中には、「十五日からのバカセイゲン」として「汽車の切符がますます取れなくなるらしい」と書かれているが、これは石炭不足による昭和20年12月15日からの旅客列車の五割削減と、それに伴う乗車制限を指すものと思われる。以上の事から、追加資料の三通は、昭和20年12月7日・同12日、昭和21年1月21日付の書簡だと推定できる。今回は追加資料の12月7日付一通を翻刻した。紙幅の都合もあり、残り二通は次回掲載とする。内容にも継続性があるため、書簡内に書かれた個別の内容についての解説は次回に回し、今回は宇野浩二と織田作之助の交流と、昭和20年春から昭和21年初春にかけて両者間で頻りに書簡が交わされた背景について説明する。

中之島図書館収蔵の宇野差出書簡は、昭和18年9月から10月までに五通。その後、昭和20年3月に復活して以降は、月二通程度手紙のやり取りをしている。昭和18年の五通は、織田作之助から献本をしたお礼のやり取りのようで、儀礼的なものとして、一旦途切れている。

両者間の交流と、手紙のやり取りの復活に至るまでの経緯については、『宇野浩二書簡集』をたどること、ある程度把握することはできるが、返信がないため、全体像が把握しがたい。しかし、雑誌『人間』で「作家と作品」という連載をしていた宇野は、織田の訃報を知り、その第三回・第四回で、それまで書いていた内容を中断して織田を取り上げた。「織田作之助の思ひ出」と題したその著作の内容から、当時の実情を概観することができる。昭和20年3月に宇野が来阪した際、全国書房が雑誌『新文学』に掲載する予定で、座談会を企画した。3月4日に新大阪

ホテルの宇野の部屋で開催された宇野浩二、織田作之助、藤沢桓夫、鍋井克之四人による「大阪の文学について」と題した座談会その場で、宇野は織田に初めて会ったと回顧している。織田は、食料事情が最悪の時期にもかかわらず、座談会の前日には宇野が宿泊するホテルに、座談会の翌日は宇野を駅まで見送った際に、都合二度にわたり心づくしの弁当を宇野に差し入れ、この年長の作家に対する好意を示している。この邂逅が、後の宇野と織田の交流の契機となったのは間違いない、このもてなしに対する宇野の礼状（3月14日付）から二人の書簡のやり取りは始まっている。

宇野が戻った東京は当時すでに連日のように空襲警報が鳴り響く状態で、当初はせっかく知り合った織田に手紙を書くこともままならなかったようだが、間もなく藤沢桓夫の紹介で、大阪で発行されている文芸雑誌『新文学』に宇野自身も関わることとなり、織田との関係も復活したらしい。『新文学』に掲載する内容などで、精力的な書簡のやり取りが行われていたが、夏頃の手紙になると、二人ともが『新文学』編集への不信感を表している様子がわかる。『定本織田作之助全集第8巻』掲載の、10月15日付織田から宇野への書簡では、『新文学』の編集者の姿勢に問題があつて、織田や宇野ら作家の意図が実現しないことに怒り、『新文学』編集らとの直接の会談と、場合によっては決別することを決意した様子がかがわれる。一方で、『新文学』とは別の方向を探る織田は、友人の柴野方彦が京都で刊行しようとしている雑誌に対して、宇野の助力を要請している。「織田作之助の思ひ出」には、織田から宇野への昭和20年11月20日付の書簡が引用されており、柴野の雑誌のタイトル案を織田から依頼された宇野が、『新小説』と『芸文』という案を出したが、すでにパテントがあるなどの事情で使用できなかったことが書かれている。また、他誌との差別化をはかるため、創刊予定の雑誌が織田の当初の目論みとは変わってしまった、日本の文芸作品中心ではなく、翻訳作品中心の雑誌

『世界文学』になった理由も述べられている。本状冒頭の「藝文」が「世界文学」にかはりましたのは遺憾に存じます。」というのはその件で、『新文学』から『世界文学』への移行の中で、織田から宇野への依頼の内容も次々に変化していく様子が読み取れる。

もともと織田は、『新文学』への新人作品の提供を、宇野に依頼していた。追伸にある「北沢君の小説」とは、それに応えた宇野が弟子の北沢喜代治の原稿を送ったものと思われる。しかし、11月20日付織田からの書簡に書かれている「あの雑誌はアテになりません。あの編集者はヨスでせうし、ゴトウ、ヤマジ両旦那はもうダメです。新人の原稿あの雑誌に送られても、ゴトウ、ヤマジの二人がよんで、二人流の感心の仕方をした上でなくては、のせないと思ひます。もう先生が力をあまり入れられるのはおよしなすつた方がいいのではないかと思ひます。」という言葉を受けて、『新文学』編集から北沢の原稿を取り戻す算段をしたようである。

この『新文学』からの離脱と、『世界文学』創刊に向けての動きの中で、昭和20年の春から昭和21年の初春にかけて、両者は非常に密に手紙のやり取りをしていたようである。宇野も「月に、一度はすくないほうで、二三次以上もするやうになつた」と「織田作之助の思ひ出」で語っている。確認できる織田の差出書簡と、宇野の差出書簡の関係については、現在のところ、次のようになっている。

- ①[昭和二十年]十月十五日／織田↓宇野 『定本織田作之助全集第8巻』
- ②[昭和二十年]十一月二十日／織田↓宇野 「織田作之助の思ひ出」引用
- ③[昭和二十年]十一月二十四日／宇野↓織田 『宇野浩二書簡集』198
- ④[昭和二十年]十一月二十六日／宇野↓織田 『宇野浩二書簡集』199
- ⑤[昭和二十年]十二月七日／宇野↓織田 ※本状
- ⑥[昭和二十年]十二月十日／織田↓宇野 『定本織田作之助全集第8巻』
- ⑦[昭和二十年]十二月十二日／宇野↓織田 ※追加資料(次回掲載)

- ⑧[昭和二十年]十二月二十九日／宇野↓織田 『宇野浩二書簡集』202
 - ⑨[昭和二十一年]二月二十一日／宇野↓織田 ※追加資料(次回掲載)
 - ⑩[昭和二十一年]二月三十一日／宇野↓織田 『宇野浩二書簡集』207
- ※「」は推定 『宇野浩二書簡集』の番号は書簡集における書簡番号

その後は、昭和21年2月14日の宇野からの書簡(『宇野浩二書簡集』212)である。ここでは宇野は『世界文学』の状況を気にしながらも、妻の病気の介護で忙しくしており、「大へんな御無沙汰をしてをります。」と書いている。間もなく宇野の妻が逝去するなどたて込んだこともあって、やや疎遠となり、以降は少し間をおきつつ4月に近況報告中心の二通。そして10月24日付の宇野からの最後の書簡(中之島図書館所蔵)は、織田から久しぶりに手紙(10月17日付)を受け取ったという記載から始まり、「どうぞ、文学のために、いろいろなもののために、お大事にして下さい。」と織田の健康状態を気遣う言葉で結ばれている。

【調査に使用した資料】

- ・増田周子編『宇野浩二書簡集』(和泉書院 2000)
- ・『定本織田作之助全集第8巻』(文泉堂書店 1978)
- ・宇野浩二「織田作之助の思ひ出」『人間』第2巻第3・4号(鎌倉文庫 1947.3-4) ほか

